裁判員裁判に参加する皆さんをお迎えするために
～応対研修～

－なぜ，応対の研修なのですか－

裁判員制度が施行されることに伴い，裁判員候補者や裁判員に選任された方など，裁判所にとって数多くの皆さんを新たにお迎えすることになります。その皆さんの多くは，これまで裁判所や裁判の手続に接する機会のなかった方々です。裁判所としても，それらの方々が感じる負担をなるべく軽くできるよう手続や事務処理上の手順や配慮を考えていく取組をしています。

初めて裁判所にお越しになる方でも緊張しないよう，また，不安や疑問をできるだけ早く解消できるよう，説明の仕方や応対の態度などについて新しい制度に相応しい工夫を加えていくことも，その一つです。応対等の工夫は，直接の裁判員制度の担当者だけでなく職員全体にきちんと定着させるため，時間をかけて取り組むことが必要と考えています。

書記官，事務官等に対する研修，教育を担当する裁判所職員総合研修所では，このような課題を解決する方策として，全国の刑事部の裁判員制度を担当する幹部職員に対して，応対等の工夫とその定着を図ることなどを目的とした研修を平成２０年３月に実施しました。この研修では，参加した職員が，自分自身の応対等の具体的な方法や在り方を学ぶだけでなく，研修で学んだ知識を活かして，各裁判所においても指導者として研修などに取り組んでもらうこととしました。

－どんな研修でしたか－

応対等の工夫とその定着は，何よりも各裁判所にいる一人一人の意識が鍵になるものです。そこで，研修では，参加者の間で，それぞれの裁判所がこれまでの経験と模擬裁判や広報活動等の取組から得られた改善・工夫例について紹介しあい，意見を出し合うなどして，より良い方法等を考えるという内容の討議を行いました。

そして，「①各職員の応対やマナーにおいて何が足りないかに気付く。②裁判員候補者がどんな気持ちで手続に参加し，職員の応対についてどう感じるものなのかを認識する。③応対を実践して具体的な手法を身につける。」というねらいから，ロールプレイという手法を使いました。具体的には，まず，参加者の一部が手続に不安を感じている裁判員候補者と応対する職員の役にそれぞれなりきり，予め

「こんなふうにロールプレイします。」

【職員同士で役を演ずるのを他の参加者がじっくりと観察しています。】

【その後，演じた人も含め，参加者全員で感じたことを意見交換するところです。】

設定された受付など具体的な場面のやりとりを実演し，これを他の参加者が観察します。その後，参加者全員で，演じたり観察したりしてそれぞれが感じたことを率直に意見交換するというものです。

このプログラムを通じて，「裁判員候補者の皆さんが職員の応対の仕方しだいで，どんな気持ちになるか理解できた。」「これまでの自分の応対では，説明が分かりにくいことが理解でき，もっと相手の立場で考えることが大事なことが認識できた。」など，多くの参加者が感想を述べ，意識を新たにできたようです。このような手法を各裁判所での研修に活用させるため，具体的なシーンの事例集やロールプレイ研修の様子を撮影したＤＶＤを各裁判所に配布しました。

－さまざまな裁判所で－

この研修の前から応対等の工夫に取り組んでいた裁判所もありましたが，それらに加え，さっそく４月ころから，全国の裁判所でも同様の取組がなされることとなりました。例えば，広島高裁では，外部の方を講師に招いて裁判員候補者が不安に思ったり，質問をしたいときのシーンを中心に，裁判員選任手続のロールプレイを取り入れた研修を実施しました。大阪地裁では，４，５月に６回にわたって刑事部の職員に半日間の研修を行いました。当初は刑事部の担当者を対象に始めた裁判所でも，順次，対象職員を広げた裁判所も見られます。研修に参加した職員の中には，「裁判員制度に参加される皆さんが，『参加して良かった。』と思われるようにしたい。」「来庁者の方に『職員が分かりやすく説明し，暖かく応対してくれたので，なんとなくあった不安が解消された。』と思ってほしい。」と改めて認識し，研修やその後の自己啓発に取り組んでいる職場もあります。各裁判所は，それぞれが工夫をして応対等に関する研修をいろいろな形で進めており，職員一人一人が適切な応対ができるよう，着実に準備に努めているところです。

「各庁ではこんな研修をしています。」

【受付でのやりとりをしています。これを周囲から観察しています。】

【集まった候補者の方に説明しています。分かりやすく説明するために頑張っています。】